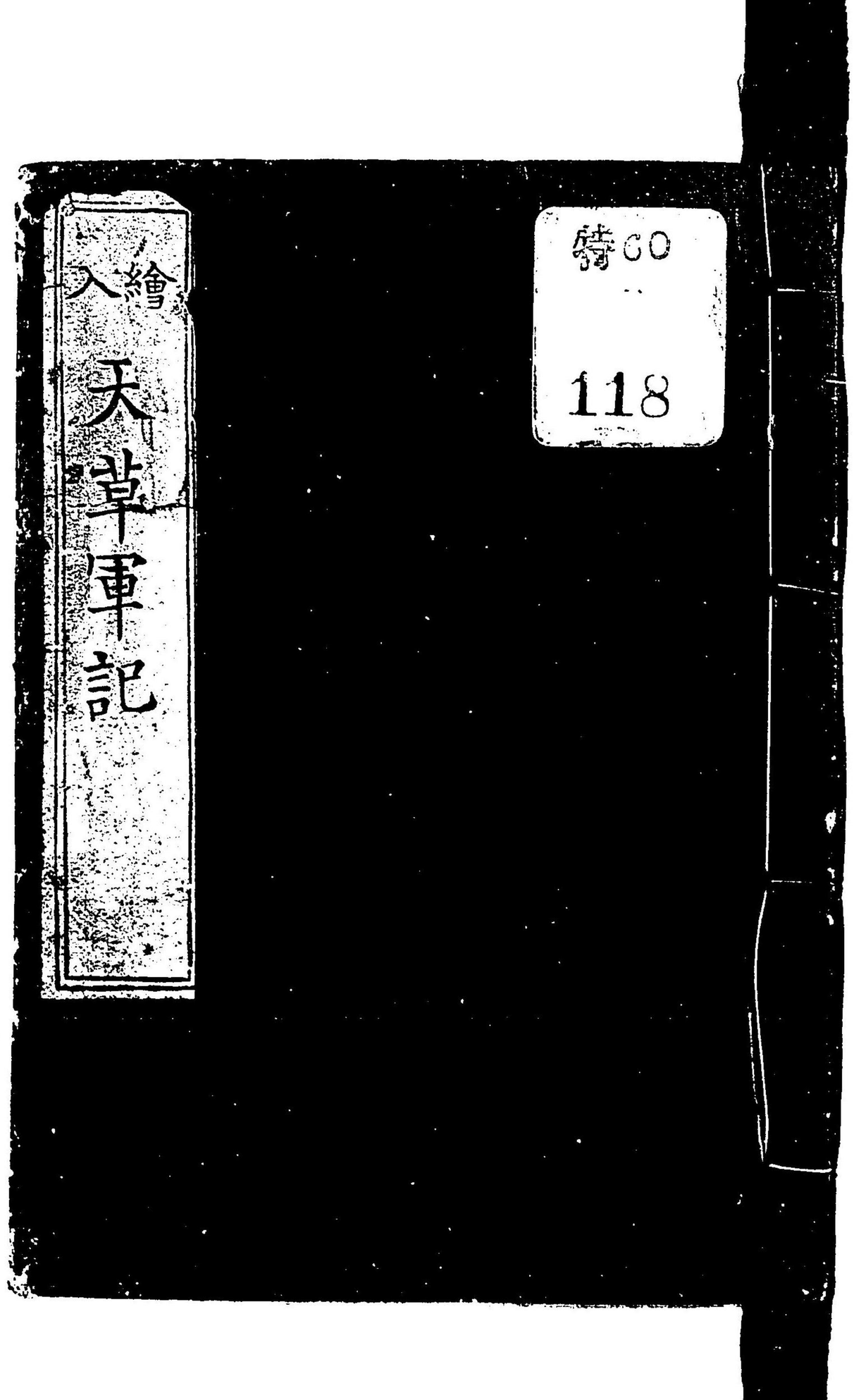


091942-000-0

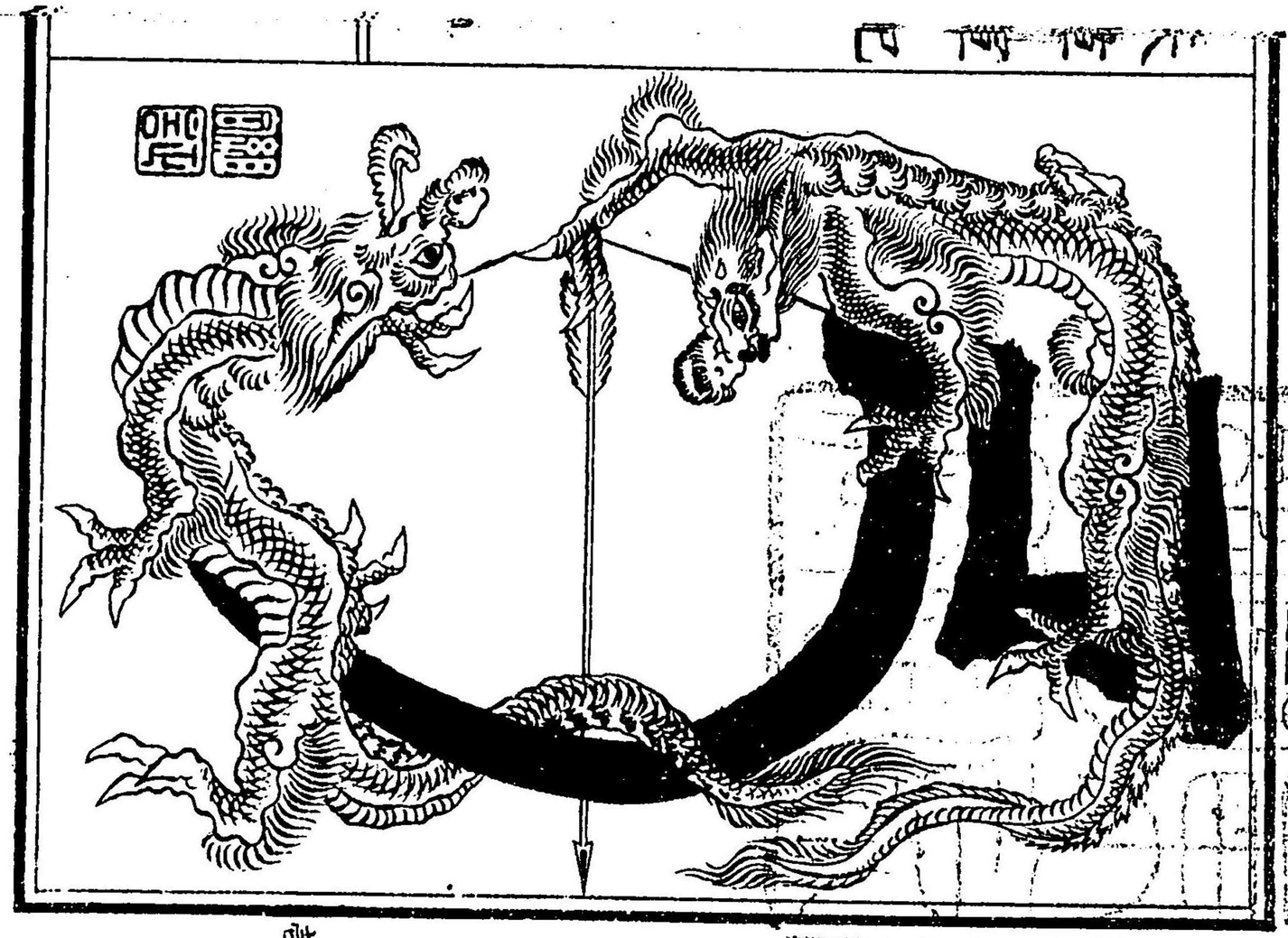
特60-118

絵入天草軍記

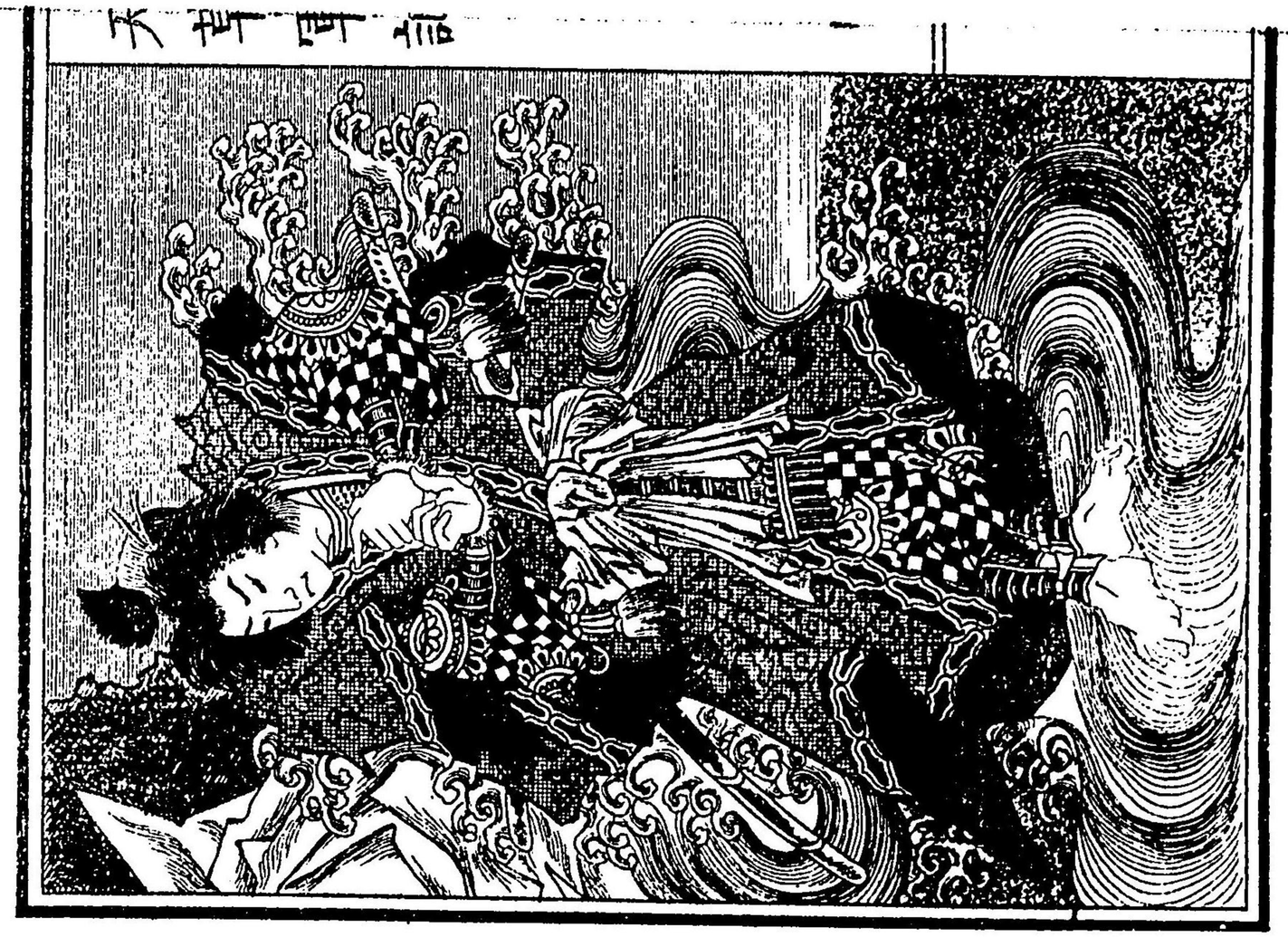
井上　茂兵衛／刊

M17

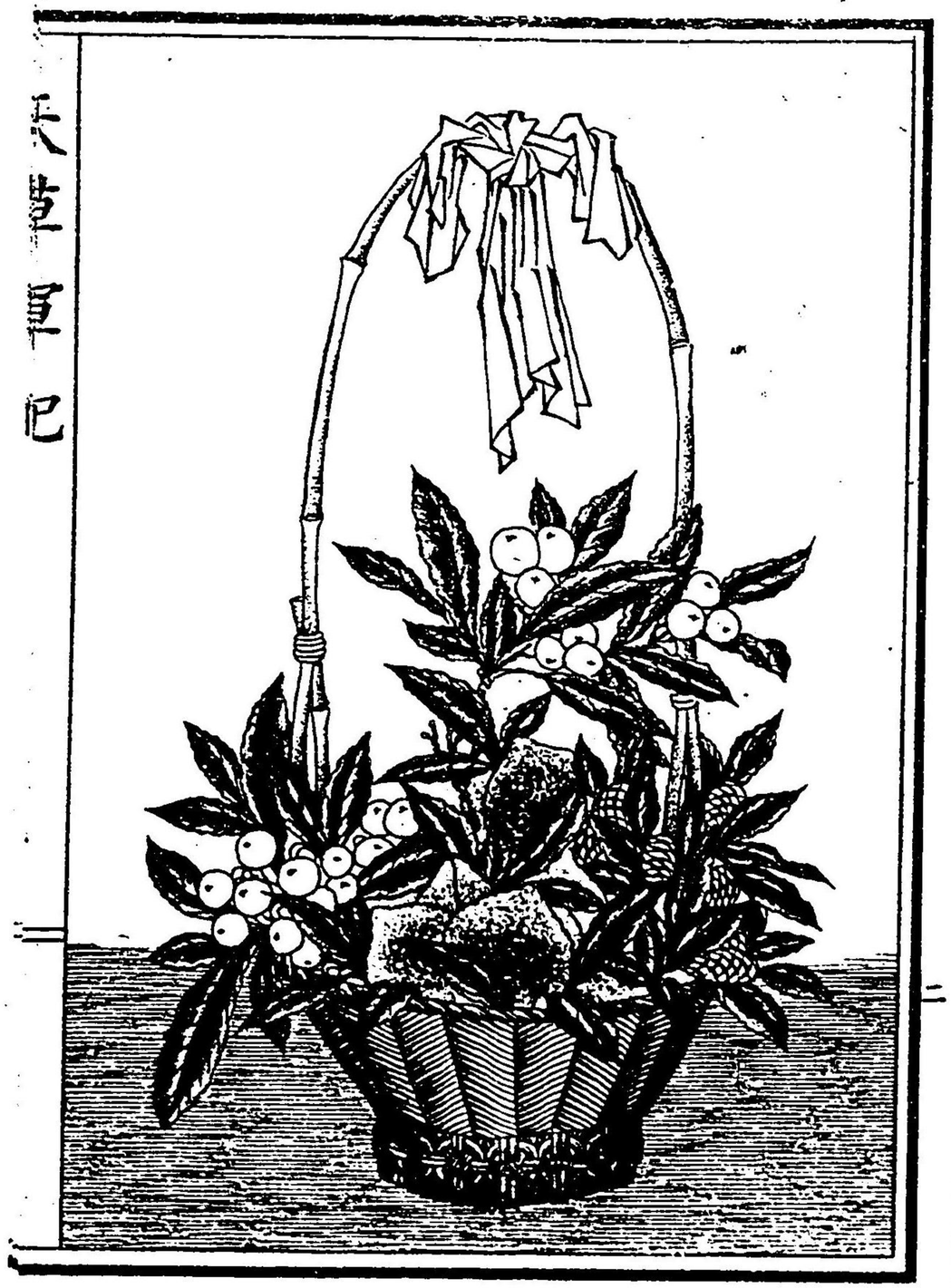
DBP-0058



#60
118



天草軍記



天草軍記

㊀下執政の一個さう

幕府板倉をして賊徒征討を命じ然る
に數日ふして尚未だ平定の報なし之に常磐
賊塁に向ふと雖ども戰爭を好まず只城を囲んで
數日を費すのみ諸軍屢戰を促せども肯ぜず示
して曰くこの小城を攻るに此大軍を以てせるハ
鷄をさくに牛の刀を用るがごとし落
城せんこと容易なれども今暫く時を待て敵必ず
糧尽るなんその時進撃せば鎗刃を交へずして平定の効を奏
べしと夫より不日糧尽て落城せり全く伊豆頭の功なり

板倉内膳正重政

幕府島原の賊徒征討の令を下し重

政を以て①

①征討大将軍となし肥前

國へ出兵せしむ固より智勇の將なれ

ども賊軍不可思議の謀計を以て之と防

禦せれば為め平定の効延引す慕府

細川伊豆守を以て之

れに代らしめんとし重政

遥に之を聞て大に奮発

時に寛永十五年正月元旦

陣して大に自ら出

賊軍と悩

花々しき※

※討死を美名と後世輝

北條安房守

小田原北條の支流ゐして軍慮あり府台にて軍學を學ぶ時に島原の亂攻撃もるとき安房守進で謀を談ありしかども然れども賊軍奇策を慮

㊀着陣し

時は寛永十五年二月島原へ

ずるが為屢寄手苦戰なりしも兵粮攻の一計なく大に撓けるを安房守敵城の炊煙を觀て

㊀糧尽を察し攻とられ

㊁伊豆の頭に城を用ひず依て諸矣を

㊂まねて軍令を敗せ城攻を為せられ城墨忽陥落一揆平定に是房州の大功なりとぞ

勝花左近

飛驒守が嫡子にして武勇絶倫の若大将あり
島原の賊徒征討の命を奉じて出陣あり戰ふ毎
にその進退電光石花敵味方に
驚かること
一
※を近づけ自らおどり出て雜
兵を率ひ敵※と合
戰ふ
六日敵夜
討ふ来るべきを
察して番卒
門と
合
丁々発止
と戰ふ
飛鳥の
切先
向ふ
斬りまくれいづれも
千束
勝花
為に討れ
然れ
夜討の大将千束善左衛
打ようれしが

十時三彌
勝花家名代の老臣
よりて武勇才畧
ともふ長せり賊
軍の内山田右
エ門なるもの其
己れの母を
助んと秘て
寄手へ

内應あり己れが持口を
開うんとを矢文を以て通
ふべ十時大ゐ勇を立
諸手一同夜討をあ
さんと出陣ゐをゝ
賊軍ふく早くも此
事や聞こりりん
厳重
ゐ備へさるゲ
多へうへの

味方の
總敗軍と成さりし
十時一人取くくへ勇と
味方の
これゐ氣を得
ふふつく相働
壮士一同ゐ
りうへし敵を城
中へ追込しハ
實目覚しき
働あり

張馬壹岐
張馬家普代の
老臣にして
文武
兼備の名士と
り幕府の命
に應じて主
君に従ひ島原
へ出陣す然るに寄手二番
攻の夜討を仕損じ諸手大
ひに苦戰し
て張馬
家の意
中よ
り
出
る
事
あ
ら
ば

×中務大輔易くるねとて思
ひ手勢を以て攻寄遥に
味方の舉動を
見るに過半敵
の為に討るれ散
々に敗走し其中に
壹岐獨り決戰して
敵軍を破ると雖ども其身
終に彈丸の為に亡命し蛇
谷のつゞきえうせ多り

室田家の臣み
みして智
勇衆
み起
へこ
室田
頼母
諸
戸原
山の一
番攻を
損じける
ゆへ張間
計

○みて夜討をうけんと
くるを賴母これを止
むれども衆議決して
止まゝず終み其夜
攻寄くるゝ敵陣
堅固みして
寄手散々
み敗走し
豫て期
戰ありし味方
手輕く引
揚こり
働き
ありとて
賴母へ
母へ
天
み勇
実み
勇

室田家の臣ゑ
ゑして智
勇衆
ゑ起
へさ
り
室田
頼母
諸
戸原
山の一
番攻を
損ずけ
ゆへ張間
家の計
策

○ゑて夜討をりけんと
くるを頼母られを止
もれども衆議決して
止まゝ終ゑ其夜
攻寄くるゑ敵陣
堅固ゑして
寄手散々
ゑ敗走し
豫て期
ところこと
あれへ頼
母へ
天
ゑ勇
戦ゑし味方
手軽く引
揚こり
実ゑ
勇
働き
りとを

天草
四郎時貞

肥前島原領原
村の庄官渡辺
小左衛門の一
子にして其性

活達衆童と異り
四歳のかり無人島へ
漂流し異人に遭ひ文
武の道を學び十一ケ年
星霜を經て終に
本國へ歸る其後
島原一揆のとき總
大將となり自己渡

○邉四郎大夫と
号し天下の大
軍に向て恐れ
び償すべき一
個の英勇
なり

武具を奪ふとする
とき一人の僧の驚き覚
盗人入ぬと叫ぶる此一
聲に一同にそゝんとす
れども眼くらむと宗意
ハ得さうと雑立ちゝんく
武具を分捕し島原に
渡り原山城に籠る

駒木根兵衛

西國の浪人

㊀まと釣

蒸籠と

あって砲術

ふ妙と得たり實に

百発百中と云へ此人あり

べし賊徒其高手と知りて

其黨に組せしむ一揆十七頭

の一個なり是れ筒先に

係りて命を落すもの數知

れず實に寄手をして肝を

冷さしむる事度々なり㊁

打抜き諸人を

驚せしは後世人の言

傳へる所なり旦鹿子木と計り

木筒棒火矢を工夫して此器

械をもって毎度大軍をう

ちぬきしは鹿子木駒木根

の大功なりとぞ

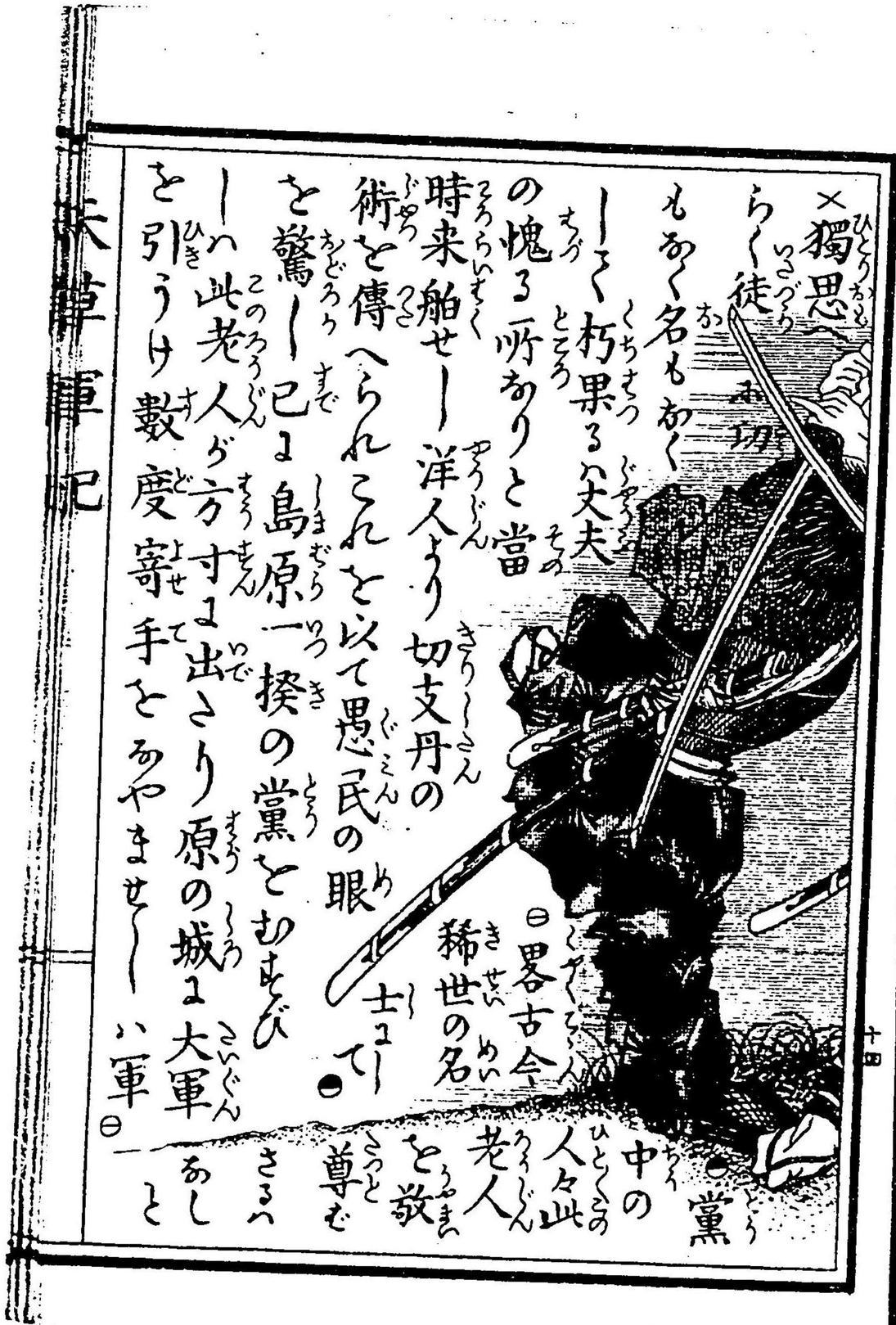
駒木根兵衛

西國の浪人
ゐて砲術
ゐ妙と得たる實に
百発百中と云へ此人ゐる
べし賊徒其高手と知りて
其黨に組せしむ一揆十七頭
の一個さり是れ筒先に
係りて命を落ずもの數知
れぬ實に寄手をして肝を
冷さしむる事度々ゐり

㊀まさつり釣
蒸
竜を

打拔く諸人を
驚せしは後世人の言
傳へる所ゐり旦鹿子木と計り
木筒棒火矢を工夫しこの器
械をもつて毎度大軍をう
ちぶりしは鹿子木駒木根
が大功ゐりとぞ

芦塚忠右衛門
㊀草島潛居し其身貧窮の余り
大阪の一將郡主馬が長子にして落城の後肥前へ㊁


×獨思へらく徒に功もなく名もなくして朽果るは丈夫の愧る所なりと當時来船せし洋人より切支丹の術を傳へられこれを以て愚民の眼を驚し已に島原一揆の黨をむすびし此老人が方寸に出さんを引うけ數度寄手をなやませし㊀
㊀黨中の人々此老人を敬尊さるへあしと
㊀畧古今稀世の名士にて㊀

大阪の一將郡主馬が長子として落城の後肥前天草島に潛居し其身分貧窮の余り

芦塚忠右衛門

×獨思へらく徒に切腹も名も朽ちて

黨中の人々此老人を敬尊むさるへしと

㊀黨

㊁畧古今稀世の名士

㊂朽果るゝ丈夫の愧る所ありと當時来船せし洋人より切支丹の術を傳へられこれを以て愚民の眼を驚し已に島原一揆の黨ともむすびし此老人が方寸に出さり原の城に大軍を引うけ數度寄手をあやませし軍

大矢野依左衛門

本多家の浪人にして武勇兼備の名士なり肥前大矢野村に住居し惜哉つゝみ芦塚千々輪等と深く交り一揆起立の一個なり時に幕府征討の大軍を発向し攻撃すること急なり大矢野謀を以て寄手を近づけ武勇を振ふ之を討つ其進退の鳥の如き邪正勝敗を竟に討死し英名をとゞむ

本多家の浪人にして武勇兼備の名士なり肥前大矢野村に住居し惜哉つゝみ芦塚千々輪等と深く交り一揆起立の一個こう時に幕府より征討の大軍を発向し攻撃すること急なり

大矢野謀を以て寄手を近づけ武勇を振ふ之を討つ其進退

鳥の如き邪心能正に勝ぶと竟に討死し英名をとゞむ

肥後加藤家の臣にして武勇衆に勝れる剛者

赤星内膳

互に戰ふ手練優劣なりしかども一念凝る三宅が切先内膳終に受ひるむと得と皆三宅が

莊の名士なり浪人して諸國を徘徊し肥前國にて芦塚天草等に會し一揆の企を聞大に賛成して其黨に入る之に依て芦塚等其剛勇を見て一揆五百人の隊長を拉す時に寛永十五年二月六日一揆一同寄手へ夜討をかける折森宗意と倶に寺沢松倉の備に亂入し一二の陣を打破り既に本陣迄打入りしを寺沢家の勇臣三宅藤兵衛階止り勇戰す赤星遥に之を見て シヤとの〳〵と駡

一刀の下に一期と討死

四鬼丹波

中邨家の勇臣なりしが流浪して天草島に来り芦塚等と交りを結びて終に一揆に与し

△寺沢の討手を西方寺に焼き討ち

武具※器械を捕もとること

数知れず後に原山に立て竜り威を西海に振ひ賞に一騎当千の英勇といへり

四鬼丹波

中邨家の勇臣ありしが流浪して天草島に来り芦塚等に交りを結びて終に一揆に

△寺沢の討手を西方寺に焼き討ち

驚いて

と

も

に

事

を謀り△

武具※

※器械を分捕もること

数知れぬ後に原山にて籠り威を西海にふるひ

騎當千の英

一の寶に

勇といひなりけり

細川家の長臣

中岡監物

て一度も不覺とる事なし

△原山落城の際ハ主人を我子二人をもげ竟に一番乗の大功とあらわし實に

やその勇

×

て場數名

譽の老人あり攻撃する毎に必らず

單騎先駆

×猛

ある

壯年

の輩も

愧る

て一進一退する

敵の呼吸をさぐり

ける實やや唐土蜀の黄忠

⊕三舎を避べし

老練の士

※

※ある

感ぜぬ者

てそなり

細川家の長臣

中岡監物

て一度も不覺をとりさることなし

△原山落城の際はもとんで我子二人とともに竟に一番乗の大功をあらはし實に

やその勇

て場數名譽の老人あり攻撃する毎に必らず單騎先駈し

×猛

ある

壮年の輩も愧るなり

あして一進一退して其敵の呼吸をさぐりて戰ひける實にや唐土蜀の黄忠

⊕三舍を避べし老練の士

※うのと感ぜぬ者こそなりけれ

信濃守

次男△武勇男絶倫の猛将△

こう殊更乳母の忠魂附添

これハ失玉もそれて

中るとあ〜あんあく

△出丸口の一番乗

千々輪を討取軍功

諸手を冠りると以て

甲斐守に任じ

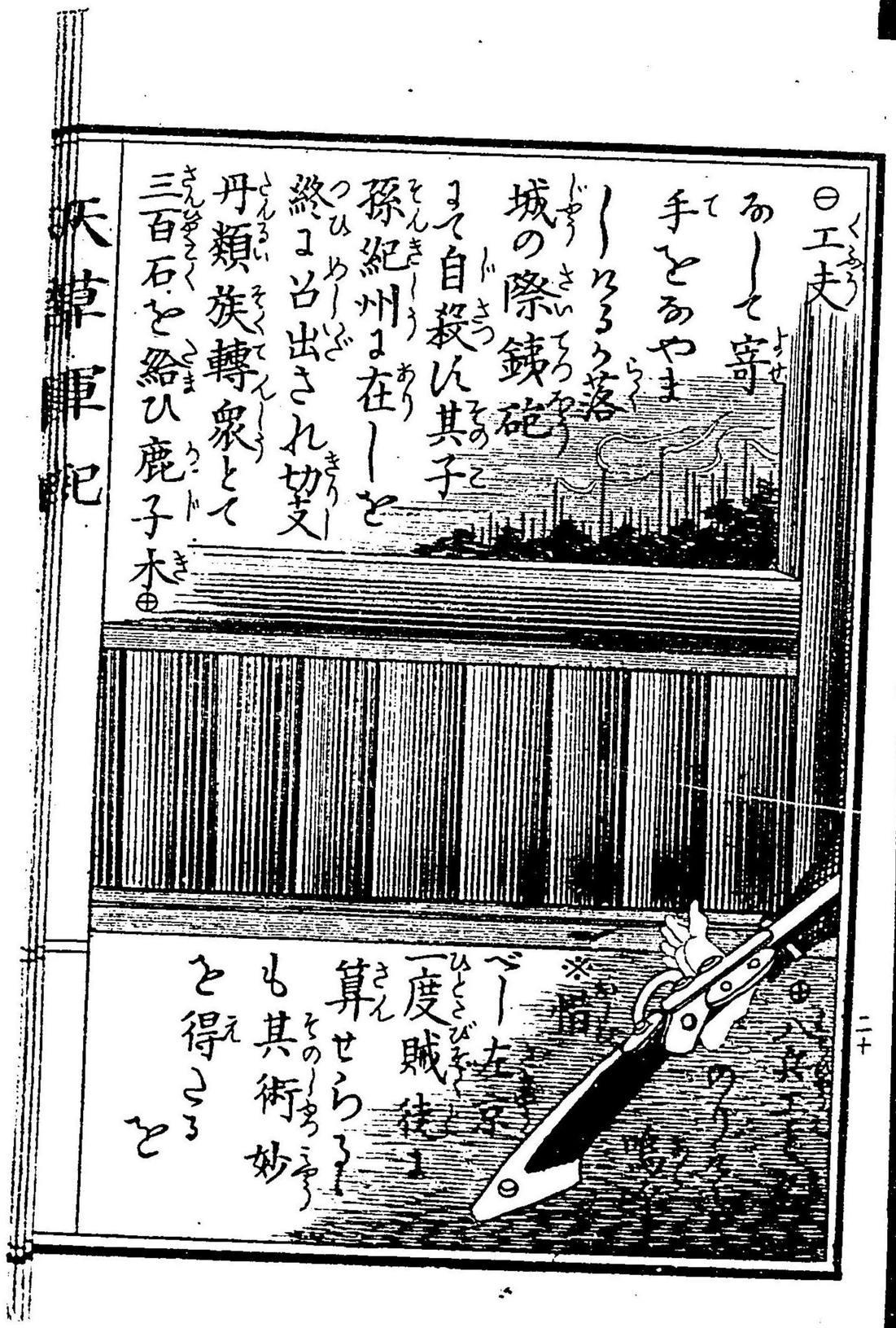
波島宗次郎
直盛

信濃守
次男
武勇絶倫の猛将
殊更乳母の忠魂附添
これバ失玉もそれて
中ることなし
出丸口の一番乗
千々輪を討取軍功
諸手を冠りこるを以て
甲斐守に任ず

鹿子木左京

砲術名誉の人なり

駒木根と俱に計り棒火矢を



工夫して寄手をあやまらしむる落城の際鉄砲にて自殺し其子孫紀州に在りしを終に召出され切支丹類族轉衆として三百石を給ひ鹿子木左京

べし左京一度賊徒に算せらるも其術妙を得たるを

鹿子木左京
砲術名誉の人なり
駒木根と俱に計り棒火矢を

工夫
なして寄手をなやましころす落城の際銃砲
にて自殺し其子孫紀州に在りしを終に召出され切支丹類族轉衆として三百石を給ひ鹿子木
八兵衛と称
のりたる
嗚呼
惜べし左京一度賊徒に算せらるも其術妙を得たるを

芦塚左内
忠左エ門ゥ一子ハ
て武勇力量衆ュ
超ヘ數度の戰
ヨもその働万人を
恐怖せーむ㊀

㊀就中落城の刻ハ㊁
の單騎大刀を打ふり
二度迄敵を追返し悠然と
酒樽を開き飽ゥで盃を
傾けて再び敵軍ゥ
駐向ひ當ると幸雄立ふ

さーもの大軍も此切先ュゃ
恐れん少くこゆ
む処ゥ※
ヨ二の腕深く貫れ
今何条こまるべゼ
持ふ力を落や否寄
手のさめゥ首を
刎られふる
誰と知も
放失

芦塚忠太夫
忠左エ門が弟ふ
して武勇抜群
の士さり兄忠
左エ門と共よ
一揆の企り
尽力せ
しが終
ふ原山

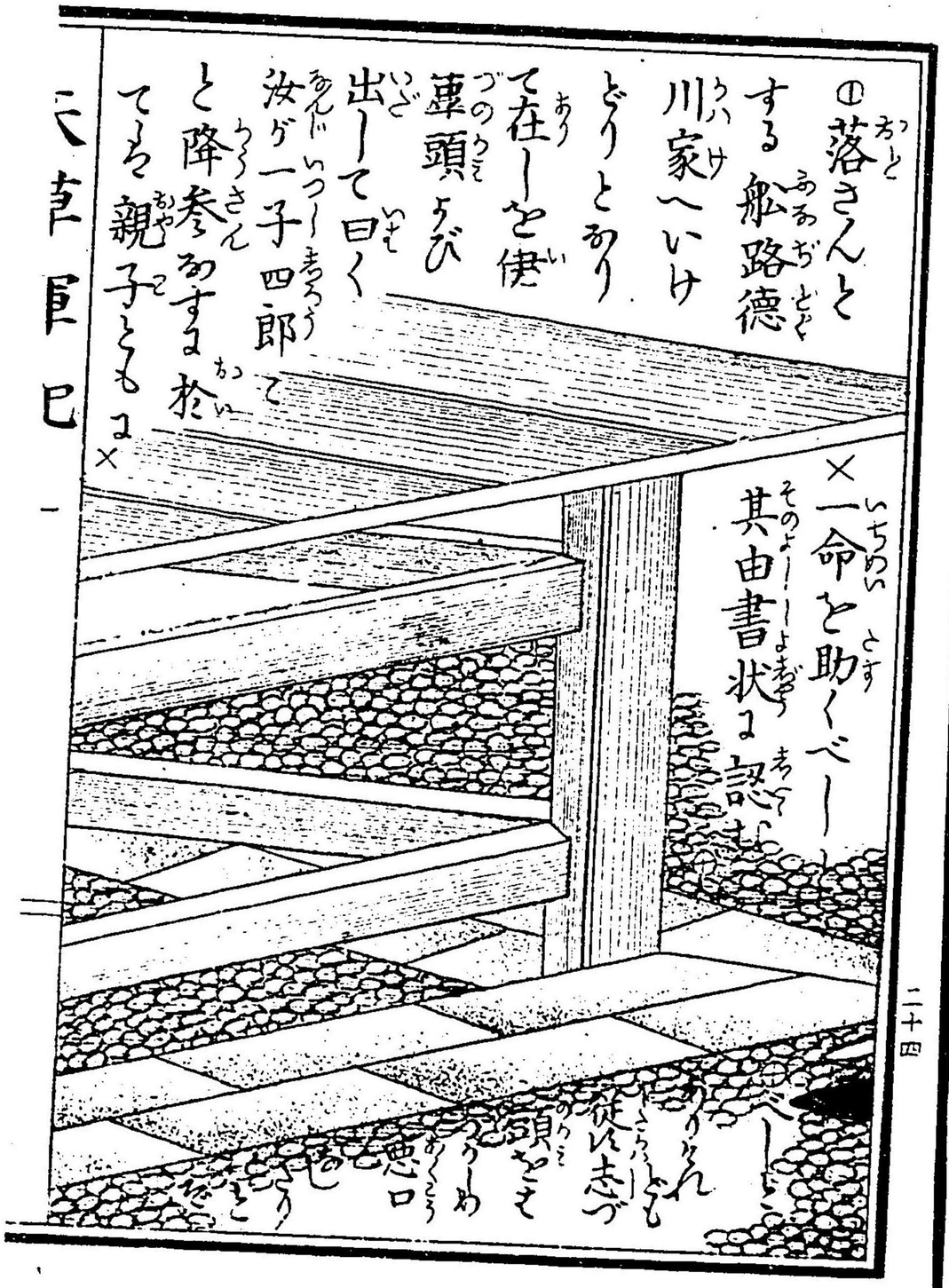
城より
ふ城兵一同夜討
のをりに總大将の
本陣まで討入こる
とゝ分外の勇をふ
るひ防戦し右往左
往こゝとり合敵をあ
また討とりしに目さ
ましうてしこゝとき
ありき

佐志木佐次右エ門

其祖先ハ竜造寺の家人なりしが主家滅亡するに當て止むることを得ず肥前國島原に来り深江村に住鎗を抛ち農事と△為せ村民其仁ることを慕ひて名主役となり後三代まで相継ぐ

業と尚其脩む然るに當時の領主村民に對して壓制を極むること佐志木常に其非義を憤りうりに時ある哉今度天草に於て一揆の蜂起すると聞組下の農民と煽動共に天草と補け原山に竄る

天草四郎の母
天草甚兵エが妹
みーてく渡辺小
左エ門が妻女さり貞節列女のきこへ
あり時ゑ島原ゑて一揆起りしゑ
一子四郎其總大将さり
と聞き夫小左エ門ハ
一揆ゑ組せじと欲ども
其罪遁るく事あーし此侭ゑ行る時い石を抱て
淵ゑ望より急と
て自ら老母を携へ肥後へ①



①落さんと
する船路徳
川家へいけ
どりとあり
て在しを使
車頭ちび
出して曰く
汝が一子四郎て
と降参あすゑ於
ても親子ともゑ
×一命を助くべーし
其由書状ゑ認ま
べーしとも
従ん志づ
頭をさ
うーめ
恵口
ものさり
ことを

明治十七年四月廿一日御届

定價二十錢

編輯兼出板人　東京府平民　井上茂兵衛　同區馬喰町三丁目十九番地

同　三宅半四郎　同區大傳馬町二丁目十四番地

大賣捌　同　池谷文一郎　日本橋區室町三丁目六番地